



TITLE:

Cultural Tourism as Creating Opportunities for Livelihood Diversification in Ethiopia(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Azeb, Girmai

CITATION:

Azeb, Girmai. Cultural Tourism as Creating Opportunities for Livelihood Diversification in Ethiopia. 京都大学, 2020, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22568>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2021-03-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Azeb Girmai
論文題目	Cultural Tourism as Creating Opportunities for Livelihood Diversification in Ethiopia (生業の多様化を生み出すエチオピアの文化観光)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカにおいて主要な経済活動分野のひとつである観光、なかでも文化観光(Cultural tourism)と呼ばれる実践をとりあげて、それがエチオピア西南部の農耕・牧畜社会の生業に及ぼす影響を記述分析している。</p> <p>エチオピアでは、農業、鉱工業、建設、都市・住居開発、貿易を主要経済分野とした第1次国家発展変革計画(GTPI) が2015年に見直され、あらたに観光分野が第2次計画(GTPII)で追加された。アフリカ諸国では、GDPの増加、雇用促進、外貨獲得などに貢献するという点で観光開発が優先されていることが多い。しかし、地域の文化を観光の対象とする場合において、その利益が実際に地元の人びとにまで届いているかは疑問視されてきた。本論文は、観光される側の人びとの生業と福祉にとっての文化観光の重要性を明らかにするために、事例研究を通じて、文化観光が地域の人びとの生業にどのように貢献しているのかを検討している。</p> <p>第1章では、文化観光の定義を紹介し、調査研究の対象としてエチオピア南部諸民族州南オモ県の2地域を選定した理由について、人びとの文化、伝統、生活とアイデンティティーに関心を寄せる観光客が、現地で直接的に人びとと出会うという観光実践がくりひろげられている場である点をあげている。また、アフリカにおける観光開発に関連した文献のレビューをおこない、エチオピア政府の観光政策と近年の持続的開発の潮流とを関連づけて論じ、人的資源の育成や参加型の開発が強調される一方で、地域社会への経済的な貢献は不十分であるという現状を指摘している。さらに、本論文で用いた調査の方法論について述べ、持続的生業という研究枠組みおよびQOL調査手法の適切性を論じている。</p> <p>第2章と第3章は、本研究の具体的な調査対象地域とした南オモ県の県庁所在地であるジンカ市郊外のアリ民族の村と、同県で農牧業を営むムルシ民族の村の2地域で実施したフィールドワークの結果についてまとめている。フィールドワークは2017年8月から2019年8月のあいだ、乾季と雨季の両方にまたがる計10ヶ月にわたって実施している。いずれの地域においても、生業に関する質的、量的な資料収集とともに、ライフストーリーの入念な聞き取り、アセット・マッピング、フォーカス・グループ・ディスカッション、インタビュー、リッカート尺度法、参与観察などの手法を用いて、実際に地元の人びとが文化観光の活動に直接的に取り組むことによって得ている経済的な利得の水準を、彼ら自身がどのように評価しているか、その基礎となる観点を探っ</p>			

ている。

第2章では、南オモ島の南アリ郡A村において、日常的な生業活動のひとつの手段として文化観光が営まれている実態を活写している。人びとは外的ショックや内的なストレスによって生活が困難な状況におかれても文化観光からの収入を享受しており、日々の生存に最低限必要な費用は文化観光からの収入で満たされているという。その一方で、自らが主体的に文化観光の内容や運営に関与することができず、観光客を案内してくる地元の若者たちが組織した観光案内協会が仲介業者として中間搾取をする現状に不満があることも紹介している。

第3章では、高度800メートル以下の低地において牧畜を主たる生業として営んできたサラマゴ郡のムルシ地域の村が過去半世紀ほどのあいだに外部世界との接触によって変容をとげてきた過程について記述している。文献と古老からの聞き取り調査に基づいて、この地域における文化観光という生業活動が、人びとの文化的な資産を利用して追加的な収入を生み出す重要な機会を提供してきたと分析している。現在では観光客からの収入は、場合によってはムルシの人びとの主要な財産である家畜を困窮時に売らなくても済ませられるほど大きいという。

第4章は、本論文の研究で採用した参加型研究手法の一部として、被調査者が写真やビデオを撮影してそれにコメントを加えてもらうという参加型映像研究手法(PVRM)を用いた成果についてまとめている。

第5章は、第2章と第3章で述べた2地域の文化観光の実践の比較をおこなっている。そのために、生活と福祉に対する文化観光の影響を、地図上に資源の配置を示すアセット・マッピングおよび認識の程度を5段階で数値化するリッカート尺度法を用いて評価している。リッカート尺度法を用いて生活の質を5段階で評価した結果、アリでは、観光の利得による満足度を村人全員が3と評価し、ムルシでは2と評価した。人びとは観光から現金を得てはいるが、生業構造を変化させるほどの十分な利得があるわけではないという。次に、生活の満足度の指標として合計13の質問を物質、共同体、感情、健康の4つのカテゴリーにわけて、2地域それぞれ50人から回答を得た結果、アリでは平均2.9、牧畜を営むムルシの村では4.1という大きく異なる値を得ている。

最後の第6章では、結論として、文化観光の実態を検討するのに際して、生業活動に役割を果たす種々の資源を参加型手法で地図上に示して共有したうえでそれぞれの資源の重要性を評価することが有効であると論じている。また、その分析結果に基づき、いずれの地域でも文化資源へのアクセスの程度によって女性がより多くの現金稼得の機会を得られるかどうかを規定していることを述べ、文化観光政策の改善につながる提言をおこなっている。

(論文審査の結果の要旨)

現代アフリカにおける観光の多くはこれまで、野生動物のような自然資源と、歴史考古学的な文化財を対象にしてきたが、近年では、人びとの日常生活そのものを観光の対象とする新たな文化観光が盛んになってきている。本論文は、アフリカにおける「伝統的」な生活を対象とする文化観光の現状について、エチオピア西南部の農耕と牧畜を営む人びとが、それを観光される側として経験し、生業の一部として取り込んできた実態を描き出した力作である。様々な調査手法を駆使した長期のフィールドワークによる研究の成果を基に、生業としての文化観光の意義と問題点を論じている。

本論文の学術的な貢献は以下の4点にまとめられる。

第1に、本論文は、現代アフリカにおける文化観光という事象を、エチオピア西南部において地理的には近接しながら社会・生態環境の全く異なる2つのコミュニティを対象に、長期のフィールドワークによって実証的に明らかにした最初の研究であるという点で貴重であり高い学術的意義を有する。生業に関する質的量的な資料収集とともに、ライフストーリーの入念な聞き取り、フォーカス・グループ・ディスカッション、インタビュー、参与観察などの手法を用いた資料の価値は高い。

第2に挙げるべき点は、牧畜と農耕という全く異なる生業を営むコミュニティが経験する文化観光に、比較の視点を導入して、その差異を対照的に浮かび上がらせたことである。例えば、農耕民の女性が文化観光に依存しなくても経常的に現金稼得の機会を維持しているのに対して、牧畜民社会における文化観光の収入は女性の自由になる新たな現金稼得手段として重要であるという指摘は貴重である。

本論文の第3の学術的貢献として、参加型映像研究手法(PVRM)を駆使して、従来は被写体として好奇の視線にさらされてきた農民や牧畜民から観光される側の視点をとりだしたことが指摘できる。著者は参加型研究手法の一部としてこの手法を取り入れ、被調査者が写真や動画を撮影してそれに批評を加えてもらう過程を記録した。また、現地において展示会を企画し、それらの写真や動画を地元の人びとと共有したことは、実践的な地域研究の試みとして高く評価できる

第4に、アフリカを例外とすることなく、異文化の理解や相互交流をめざす文化観光が標榜される機会が増えつつあるグローバルな思潮のなかで、エチオピアにおける文化観光の現状を批判的な事例として記述・分析したことを踏まえて、アフリカにおける文化観光に対する政策への提言をおこなったことを評価したい。

本論文の研究が、観光される側に寄り添っておこなわれたがために、観光する側の行動の特徴や意図には深く接近できていないことは惜しまれるが、それを凌ぐ当事者の認識に関する厚い記述が本論文の基盤としての価値を高めている。くわえて、本論文は、エチオピアの高地出身の女性研究者が高い当事者意識を動機として、過酷な条件の僻遠の地に赴

いて地域研究分野の長期の参与型フィールドワークをおこなった数少ない事例として特筆すべき業績であるといえる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。